

# 明清文学由来の漢語について

## — 「探偵」「偵探」を例として—

樊 怡 君

### 1. はじめに

日本における中国文化の影響の広がりについて、阿川・小松・佐藤・蔣 (2016:101) は、平安時代までは、その担い手が貴族に限られていたが、鎌倉時代以降は武士層にも浸透を始め、近世後期には、その影響力が質的にも深化し、量的にも飛躍的に増大し、庶民層にまで及び、その傾向は幕末を経て明治以降も続いたと述べている。近世後期～明治初期には、明清文学も受容され、そこに現れた語が日本語に浸透し、日本文学や日本漢語に広く影響するようになったとされる。例えば、明清文学作品では、中国社会で流行していた白話小説 (『水滸伝』『三国志演義』など) が海を隔てた江戸期の日本に伝来し、江戸時代の日本で出版業が確立していくなかで、馬琴などの作家に大きい影響を与えて、翻訳・翻案小説という形で受容されていった。明清文学作品における近代漢語は、日本語に影響を与えているが (令狐 2021)、本稿で取り上げる「探偵」「偵探」はその一つの例であると思われる。

本稿では、明清文学作品における「探偵」「偵探」、及び両語の日本語への伝来について、考察していく。

以下、2節では、樊 (2022 予定) に基づき、『日本国語大辞典 第二版』『漢語大辞典』によって、日中両言語における「探偵」「偵探」の語史を概観し、3節では、明清文学作品における「探偵」「偵探」の用例を挙げ、4節では、「探偵」「偵探」の日本語への伝来を探り、5節では、本稿における調査結果をまとめる。

### 2. 日中両言語における「探偵」「偵探」の語史

#### 2. 1 『日本国語大辞典』にみる語史

日本語における「探偵」「偵探」の語史をおおざっぱに把握するために、『日本国語大辞典 第二版』(小学館) (以下、『日国』と略す) の記述を見ておく。

『日国』では、「探偵」について、「① (一する) ひそかに相手の事情、またはある事件の事実関係などを調べること。また、それを職業とする人。」という意味で、『花柳春話』(1878～1879) の例が初出例として示され、「② こっそりと敵の内情をさぐりしらべる人。」という意味で、『落語・湯屋番』(1893) の例が初出例として示されてい

る。(下線は筆者による。以下同じ。)

- (1) 二人の悪徒を探偵 (タンテイ) すれども未だ縛に就かず。

『花柳春話』〔1878～79〕(織田純一郎訳)

- (2) 『何処眼中のスドヒ処か何かを見たんでせう』

『全(まる)で探偵を見たいな女だねへ』

『落語・湯屋番』〔1893〕(三代目三遊亭円遊)

ここから、「探偵」という語は、明治初期ごろから使われるようになったことが推測される

一方、「偵探」については、現代日本語では使われていないと思われるが(「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)には用例が見られなかった)、『日国』には、「偵探」の見出しがある。『日国』では、「偵探」については、「①探偵をいう、盗人仲間の隠語。」という意味で、『日本隠語集』(1892)が初出文献として示され、「②警察官をいう、盗人仲間の隠語。」という意味で、『隠語輯覧』(1915)が初出文献として示されている。ここから、「偵探」という語は、明治後期ごろ、隠語として使われていたことが推測される。

## 2. 2 日本語における「探偵」「偵探」の初出に関する補足

『日国』によると、日本語における「探偵」という語の使用については、1878～1879の『花柳春話』の例が最も古い。『日本大百科全書』に「探偵方」という江戸時代の役名に関する記述があり、幕末の新選組に「国事探偵(方)」という役名があったとする(明治以降の)記録などがあるので、「探偵」は幕末に使われていたとも思われる。

- (3) 日本では江戸時代の同心(どうしん)、岡引(おかっぴ)きが探偵方といわれたことから、明治になっても巡査、刑事が探偵とよばれていたが、明治20年代に私立探偵が現れるに及んで、しだいに警察関係は探偵とよばれなくなった。

[梶 龍雄]

『日本大百科全書』(小学館)「探偵」

- (4) 二、三日して新入の四名をまねき隊長近藤からあらためて国事探偵の職をさずけ、当座の手当として金百両をあたえ、

(永倉新八「いかめしき甲冑姿、新選組へ長の刺客」『新撰組顛末記』<sup>(1)</sup> 2009, p92)

しかし、樊（2022 予定）の調査では、江戸時代の書籍、辞書、その他の文献には「探偵」の用例は見つからず、以下の明治元年（1868）のものが最も古かった。

- (5) 徳川氏ノ時、各駅村ニ於テ、其ノ住民ニシテ恒産ヲ有シ、品行正直ナル者ヲ  
選択シ、命スルニ警保探偵ノ事ヲ以テス  
「東京附近ノ駅村ニ探偵者ヲ置キ会計局之ヲ統管ス」  
『太政類典・第一編・慶応三年～明治四年・第二百十一卷・東北征討始末一・徳  
川氏征討一』明治元年9月（1868）

以上のように、樊（2022 予定）で調査した範囲においては、「探偵」の用例は、明治初年以降のものしかなかった。ここから考えると、「探偵」という語の使用は、せいぜい幕末頃からであろうと推測できる。また、いくつかのデータベースで「探偵」を調べたところ、江戸後期および明治初期の資料（史料）においては、「探偵」ではなく、「探索」が使われていることが多かった。ここから、「探索」が「探偵」が生まれる前の言い方ではないかと推測される。

一方、「偵探」の初出文献としては、『日国』には、『日本隠語集』（1892）、『隠語輯覧』（1915）が挙げられているが、いくつかのデータベースを調べてみたところ、これより古いものが見つかった。

- (6) 「権中警視綿貫吉直偵探書」  
『岩倉具視関係文書』1880（国立国会図書館デジタルコレクション）

上の例は記事のタイトルのみで本文がないが、「偵探」という語が「事情を調べる」という意味で使われているようである。ここから、日本語において「偵探」は、1880（明治13）年頃には使われていたと考えられる。

### 2. 3 中国語における「探偵」「偵探」の語史

中国語における「探偵」「偵探」の語史をおおざっぱに把握するために、『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社）の記述を見てみた。その結果、「探偵」は、「①探りをいれる」という意味で、宋代から使われ（『唐語林』）、「②便り」という意味で、明代から使われ（呉承恩『贈郡伯古愚邵公報政序』）、「③密かに調べる」という意味で、清代から使われていた（蒲松齡『聊齋志異』）。一方、「偵探」については、「①密かに探索する」という意味で、明代から使われ（『四友齋叢説』）、「②機密を偵察したり、案件を調査

したりする人員」という意味で、1930年代から使われている（老舍『黑白李』）。

また、中国語における「偵探」の「②機密を偵察したり、案件を調査したりする人員」という意味について、データベースを調べてみると、清の咸豊年間（1851～1860）の例が見つかった。この用法は、19世紀後半には使われていたようである（樊2022予定）。（以下、[ ]内は筆者による。字体は現代日本語の通用字体に統一する。）

(7) 既設有偵探。亦当飭令沿海及陸路一帶。實力稽查。不可稍涉大意。

[探偵がいるなら、沿海及び陸路一帶に命じて、専心に調査させ、少しも油断しないようにすべきである]

清実録・文宗顯皇帝実録（咸豊実録影本1986）卷之三百十九  
（「瀚堂典藏古籍庫」）

以上から考えると、中国語における「探偵」「偵探」の初出は、日本語よりかなり早く、「探偵」「偵探」の両語とも中国起源であると推測できる。

### 3. 明清文学作品における「探偵」「偵探」

『漢語大詞典』の記述によると、「探偵」「偵探」は、明代・清代の文学作品に多く出てきている。ここから、明清文学が江戸時代の日本に伝わって読まれたことによって、「探偵」「偵探」が日本語に入った可能性が高いと考えられる。ここでは、まず、「瀚堂典藏古籍庫」<sup>②</sup>の全文検索によって、「瀚堂典藏古籍庫」収録の明清文学作品における「探偵」「偵探」の用例数を示す。

表1 「瀚堂典藏古籍庫」の明清文学作品における「探偵」「偵探」の用例数

	「探偵」	「偵探」
用例数	11例	3643例

表1から、明清文学作品においては、「偵探」の用例数が「探偵」を大幅に上回っている。つまり、明清時代には、「偵探」が主に使われていたことがわかる。

3.1で、明清文学作品における「探偵」「偵探」の具体的な用例を挙げてみよう。

#### 3.1 明清文学作品における「探偵」の用例

ここでは、「中国哲学書電子化計画」、「瀚堂典藏古籍庫」などに現れた、明清文学作品における「探偵」のいくつかの用例を挙げる。

(9) 為今之計，当先委幹員前往潼関，探偵動静，更伝檄雍州節度，早為捕治。  
[今の計は、先ず幹員に前後して潼関を委ねるに当たり、動静を密かに調べ、更に雍州節度に伝檄して、早く逮捕しようとするものである。]

清・魏秀仁『花月痕』「第四回 短衣匹馬歳暮從軍 火樹銀花元宵奏凱」

(10) 哭得李家的男女，個個驚疑，都走来窓外探偵。那兩個小丫鬟，只站著怔怔的看。

[李家の男女は、(秋痕の) 泣き声に驚いて、みなやってきて窓の外を密かに窺う。その二人のメイドは、ただ立って、呆然として見ているだけだった。]

清・魏秀仁『花月痕』「第十八回 冷雨秋深病憐並枕 涼風天末縁証断釵」

(11) 却説荷生守護帥印，辦理善後事宜，小住太原。探偵紅卿父母俱亡，就差人接来。将那竹塢收拾与紅卿居住。

[さて、荷生は将帥の印を守り、事後処理をするために太原に滞在していた。紅卿の両親がともに亡くなったことを密かに調べて、人を遣わして彼女を迎えに行かせた。竹塢を片付けて、紅卿を住まわせた。]

清・魏秀仁『花月痕』「第四十七回 李謬如匹馬捉狗頭 顔卓然单刀盟倭目」

(12) 数月不敢復往，而心念雲棲不忘也，但不時於近側探偵之。

[数ヶ月敢えて行かず、心の中で雲棲のことを思い、忘れなかったが、ときどき近くで密かに窺うことしかできなかった。]

清・蒲松齡『聊齋志異』「第十一卷 陳雲棲」

(13) …又自外入至西北隅有帶劍操斧手執弓槌者凡数百挈幄幕簾榻盤櫟鼎鑊者又数百負器盛陸海之珍味者又数百道路往返奔走探偵者又数百…

[…また外から西北隅まで入ると、劍を帯び、斧を操り、弓と槌を執る者がおおよそ数百おり、幔幕、簾榻、盤櫟、鼎鑊を携えている者がまた数百おり、器具を背負い、陸海の珍味を盛る者がまた数百おり、道を往復奔走して密かに窺う者がまた数百…]

明・陸楫『古今説海』「卷三十七 説淵十七 虬蟄伝」(『四庫全書』)

(14) 団練之衆。雖不足以当大賊。而声勢既張。則小賊亦不敢有窺伺。賊匪將至。必先有探偵。無備乘虚而入。

[団練(民兵)の衆は、大盗賊とするには足りないが、すでに勢いに満ちていた

ため、鼠賊も窺う勇気がない。賊が来るときには、必ずまず密かに探って、備えのない、虚に乗じて侵入する。]

明・陳子龍『皇朝經世文編』「卷八十二兵政十三山防」

以上の用例(9)～(14)では、「探偵」はすべて「密かに調べる。またはそのこと。」という意味で使われている。つまり、明清時期における「探偵」は、主に「密かに調べる。またはそのこと。」の意味として使用されていたことが推測できる。さらに、これは、『日国』における「探偵」の明治初期の初出例の意味、「(一する)ひそかに相手の事情、またはある事件の事実関係などを調べる。また、それを職業とする人。」に合っていることがわかる。

### 3. 2 明清文学作品における「偵探」の用例

ここでは、「中国哲学書電子化計画」、「瀚堂典藏古籍庫」などに現れた、明清文学作品における「偵探」のいくつかの用例を挙げる。

(15) 宋江伝令，教一面收拾攻城器械，一面差精細軍卒，四面偵探消息。

[宋江は伝令して、一方で城を攻めるための装備を整え、一方で精兵を派遣し、四方に状況を密かに探らせた。]

明・施耐庵『水滸伝』「第一百零六回 書生談笑却強敵 水軍汨没破堅城」

(16) 宋江留李俊在帳中，略飲几杯酒，有偵探軍卒來報，說城中如此如此，將兵馬去襲宛州了。宋江听罷大驚，急与吳用商議。

[宋江が李俊を帳に残し、酒を少し飲んでいたところ、探偵の兵士がきて、「町はかくかくの状態になっており、兵馬を率いて宛州を攻めに行った」と報告した。宋江はこれを聞いて大いに驚いて、急いで吳用と話し合った。]

明・施耐庵『水滸伝』「第一百零六回 書生談笑却強敵 水軍汨没破堅城」

(17) 且說宋江等兵馬，到紀山北十里外扎寨屯兵，準備衝擊。軍人偵探賊人消息的虛實回報。

[一方、宋江らの軍は、紀山の北10里に屯營して、進攻の準備をしている。官軍は賊の情報の虚実を密かに探って報告する。]

明・施耐庵『水滸伝』「第一百零七回 宋江大勝紀山軍 朱武打破六花陣」

(18) 宋江等水陸大兵，長驅直至南豊地界，哨馬報到，說偵探得賊人王慶將李助

為統軍大元帥，就本處調選水陸兵馬五萬。

[宋江らの水陸大軍は、一気に長い距離を駆け抜け、南豊地界に至る。哨戒の兵士が来て、「賊の王慶が李助を統軍大元帥とし、そこで、水陸五万人の兵馬を選んだことを密かに探り当てた」と述べた。]

明・施耐庵『水滸伝』「第一百零八回 喬道清興霧取城 小旋風藏炮擊賊」

(19) 隣生述燕兒之言。生乃啓関，將往偵探，苦無由。張母聞生果未帰，益奇之。

[東隣生は燕兒の言葉を述べた。それを聞いて、桑生は扉を開けて、密かに見に行こうと思ったが、そこに行く理由がなく、困った。張母は、桑生が結局帰らなかったと聞いて、さらに驚いた。]

清・蒲松齡『聊齋志異』「第二卷 蓮香」

(20) 生把臂哽咽，問：「好事如諧，何處可以相報？」

曰：「妾常使人偵探之，諧否無不聞也。」

[慕生は白秋練の腕を握って、声を詰まらせて、言った。「いいことがうまくいったら、どこに知らせればいいのか」]

秋連は言う。「私は常に人に密かに探らせているけど、うまくいっているかどうか聞かないことはないわ。』

清・蒲松齡『聊齋志異』「第十一卷 白秋練」

(21) 除卻原告及心腹一二人知之此外並不得與聞或潛遣細作預為偵探

[原告と腹心の一二人が知っているほかは、あずかり知ることができない。あるいは、密かにスパイを遣わし、あらかじめ密かに探るかもしれない。]

清・『福惠全書』卷之十七

(22) 而吳浙之間、有等積年巨蠹。盤踞衙門。專通上下線索。勾連地方勢豪。偵探官府短長。

[吳浙の間に、このような巨悪が長年いて、衙門に盤踞し、上下のつながりに通じており、地方の勢力のある豪族と結託して、官府の情報を密かに探る。]

清・『福惠全書』卷之二十

以上挙げた用例 (15) ~ (22) では、「偵探」はすべて「密かに調べる。またはそのこと。」という意味で使われている。つまり、明清時期において「偵探」は、「密かに調べる。またはそのこと。」という意味で使用されていたことが推測できる。さら

に、これは、『日国』における「探偵」の明治初期の初出例の意味、「(一する) ひそかに相手の事情、またはある事件の事実関係などを調べること。また、それを職業とする人。」に合っていることがわかる。

#### 4. 「探偵」「偵探」の日本への伝来

江戸時代には、中国商品に対する需要が大きく、中日交流は非常に盛んだった。大庭(1967)によると、明清文学作品の書籍は、唐船で日本国内にもたらされ、日本文学や日本漢語に広く影響を与えたとされる。

ここでは、3節に挙げられている用例の出典の文学作品について、日本への伝来及び日本での受容を確認していく。

##### 4. 1 『聊齋志異』の日本への伝来・受容

3節で見たように、「探偵」も、「偵探」も、『聊齋志異』にその例が見られる。『聊齋志異』は、清朝初期の文人である蒲松齡が著した文語体の怪異小説集であり、日本にも早くに伝わり、人気があったようである。

磯部(2016:402)によると、江戸後期には「聊齋癖」(聊齋マニア)という言葉があり、聊齋志異をこよなく愛し、魅せられた人々が多くいたという。さらに、磯部(2016:402)は、『聊齋志異』の日本への伝来について、以下のように述べている。

(23) 日本に『聊齋志異』が入って来たのは江戸の後期である。『商舶載来書目』には明和五年(一七六八)に一部舶載されていたことが記されている。今日残る『聊齋志異』の最も古い版本は、趙起杲『青柯亭刻本聊齋志異』で、乾隆三十一年(一七六六)に上梓されたものであることから、刊行して何年も経たないうちに日本にもたらされたことになる。しかし、江戸時代の具体的な受容についてはほとんど明らかにされていない。僅かに、一九八〇年代に、徳田武氏によって、都賀庭鐘が天明六(一七八六年)に『聊齋志異』「恒娘」を翻案したこと、森島中良の「風草紙」(寛政四年刊)九話仕立てのうち七話が『聊齋志異』の翻案であることなどの指摘がなされたにとどまる。

『聊齋志異』は、大庭(1967)によると、上の『商舶載来書目』に記された「明和五年」以外に、寛政12年(1800)、嘉永7年(1855)にも、唐船に舶載されて伝来している(『外船齋来書目』『書籍元帳』(長崎県立長崎図書館蔵))。

以上から、『聊齋志異』については、具体的な受容はあまり明らかにされていないようであるが、江戸後期に日本に伝来・受容されていたことは確かである。このほ



か、徳田武のブログによると、江戸時代後期の国学者の平田篤胤は『聊齋志異』を読んでいたようである（徳田（2020）令和2年10月24日の記事）。これは、『聊齋志異』が江戸後期の日本で受容されたことの一つの証拠であるといえる。

#### 4. 2 『水滸伝』の日本への伝来・受容

日本の江戸時代の「読本」は、中国白話文学の影響を受けて発生したジャンルであるとされる。『日本大百科全書』には、「読本」について、以下のような記述がある。

(24) 江戸時代の小説の様式。…中国の小説の様式や筋・趣向を学び取ることによって生まれた、近世ではもっとも知的で近代小説に近づいた小説である。…一方、中国の一大雄編『水滸（すいこ）伝』の建築的な構成と精妙な人間像の描き分けに刺激されて、『湘中（しょうちゅう）八雄伝』（1768刊）、『本朝水滸伝』（1773刊）などの水滸翻案物も相前後して続出し、それら長編読本の伝統を踏まえて、のちには曲亭馬琴（ばきん）の『南総里見八犬伝（なんそうさとみはっけんてん）』という大作が完成される。〔徳田 武〕

以上の記述から、明の白話小説である『水滸伝』は、日本の近世文学に大きな影響を与えたことがわかる。

『水滸伝』の日本への伝来については、大庭（1967）に、享保2年（1717）、享保10年（1726）、天保12年（1842）、弘化4年（1848）、嘉永7年（1855）に、唐船に舶載されて伝来したことが記されている（『大意書』（長崎市立博物館蔵聖堂文書）、『書籍元帳』（長崎県立長崎図書館蔵）、『商舶載来書目』（国立国会図書館蔵））。

その後、『水滸伝』は、岡島冠山の『通俗忠義水滸伝』、山東京伝の『忠臣水滸伝』、曲亭馬琴の『傾城水滸伝』など、多数の翻訳、翻案がなされた。しかし、『水滸伝』の日本での流行を物語る最大の証拠は、曲亭馬琴が『水滸伝』を翻案して、『南総里見八犬伝』を創作したことであろう。孫（2020：273）は、馬琴自身の記述である『八犬伝』の序跋文などによって、『南総里見八犬伝』に最も大きな影響を与えたのは『水滸伝』であることは明らかである、と述べている。

以上をまとめると、『水滸伝』は、江戸時代の日本に伝来し、当時の文学者に影響を与えて、多数な翻訳・翻案がなされたことは明らかである。ここから、『水滸伝』の語彙が日本語に影響を与えた可能性も考えられるであろう（なお、筆者が調べた範囲では、『南総里見八犬伝』に「探偵」「偵探」は見られなかった（樊（2022 予定）））。

4. 3 ほかの明清文学作品の日本への伝来・受容

4. 3. 1 『福惠全書』

諸橋轍次の『大漢和辞典』には、「探偵」と「偵探」が語彙項目として立項されているが、「探偵」には用例がなく、「偵探」には『福惠全書』（1694）の例が載っている。

(25) 【偵探】 テイタン

- ㊦ うかがひさぐる。〔福惠全書、刑名部、賊盜上、緝捕〕預為「偵探」。
- ㊧ chen<sup>1</sup> tan<sup>4</sup> ㊦ 斥候。㊧ 探偵。諜者。スパイ。

除却原告及心腹一二人知レ之此外並不レ得二與聞一或潜遣二細作一預為二偵探一

『福惠全書』 卷之十七刑名部 賊盜上 緝捕（詩山堂和刻本（明治初期））

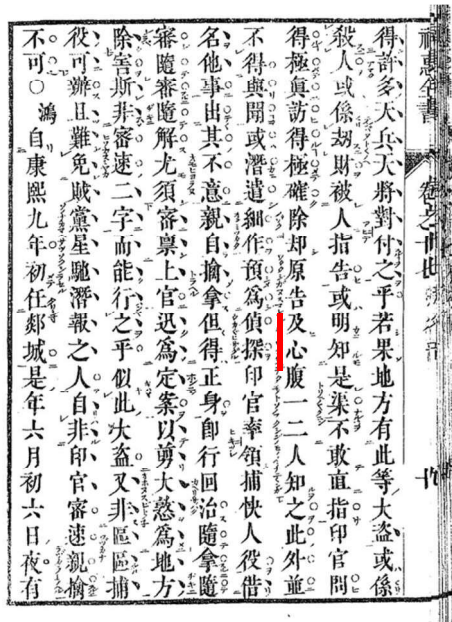


図1 『福惠全書』 卷之十七刑名部 賊盜上 緝捕

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/900684/12>

『福惠全書』の日本への伝来については、大庭（1967）に、享保12年（1728）、天保12年（1842）、天保15年（1845）、嘉永元年（1848）に、唐船に船載されて伝来したことが記されている（『書籍元帳』（長崎県立長崎図書館蔵）、『商船載来書目』（国立国会図書館蔵））。

和刻本『福恵全書』の享受に関しては、荒尾（2020）によって、江戸中期に、為政者や儒者、通事に読まれていた中国版本『福恵全書』が和刻されたことにより、一層広汎な知識人に読まれるようになり、明治初期には法制研究にも用いられたことが明らかになっている。さらに、荒尾（2020）は、『福恵全書』に使用されている中国語の一部が新漢語となった可能性が認められるとし、日本語化する仕組みとしては、中国語彙の左に付された振仮名（訳解）が有効に機能し、その語彙や文体は口語性を持つと述べ、『福恵全書』が明治期の辞書にも影響を与えたことを明らかにしている。

#### 4. 3. 2 『古今説海』『皇朝経世文編』

『古今説海』は、大庭（1967）によると、宝暦10年（1761）、天保12年（1842）に、唐船に船載されて日本にもたらされている（『商船載来書目』（国立国会図書館蔵）、『書籍元帳』（長崎県立長崎図書館蔵）。一方、『皇朝経世文編』は、天保12年（1842）、弘化2年（1846）に、唐船で日本に伝来している（『書籍元帳』（長崎県立長崎図書館蔵））。

今回調査したかぎりでは、『古今説海』と『皇朝経世文編』が江戸時代の日本で受容されたかどうかは不明であるが、唐船で伝来した記録があり、江戸時代に日本へ伝来したことは確かである。

#### 4. 3. 3 まとめ

江戸時代に、中国から多くの書物が日本にもたらされ、そこに使われていた言葉になじみのある人が増え、その知識が、後の新漢語に生かされたということが考えられる。「探偵」「偵探」は、いずれも、中国語から日本語に入った語であると思われる。

### 5. 終わりに

本稿では、明清文学作品における「探偵」「偵探」、及び両語の日本語への伝来について、考察した。その結果をまとめる。

#### (a) 明清文学作品における「探偵」「偵探」について

まず、「瀚堂典藏古籍庫」の明清文学作品における両語の用例数を確認したところ、「偵探」のほうが圧倒的に多く、明清時代には、「偵探」がより広く使われていたことがわかった。

次に、その用例における両語の意味を分析してみると、「探偵」「偵探」ともに、すべて「密かに調べる。またはそのこと。」という意味で使われている。つまり、明

清時期における「探偵」「偵探」はともに、主に「密かに調べる。またはそのこと。」の意味で使用されており、この意味が明清時期における両語の基本義であったことが推測できる。

(b) 「探偵」「偵探」の日本への伝来について

「探偵」「偵探」ともに、中国語起源であり、近世に日本に流入された語であると考えられる。江戸時代には中国から多くの書物が日本にもたらされていて、「探偵」「偵探」のような、『聊斎志異』や『福恵全書』などに使われていた言葉が日本語に移入したと思われる。

今後の研究課題としては、日中語彙交流史の観点から、①「探偵」「偵探」のうち、なぜ「探偵」のみ現代日本語に定着したか、②日本語における「探偵」は、中国語の「探偵」が日本語に流入して、そのままに使われたものなのか、あるいは、中国語の「偵探」の字順を逆転して作られた語なのか、などについて明らかにしていきたい。また、本稿における調査についても、さらに調査資料を増やし、深く追究していきたいと思う。

#### 【注】

- (1) 1913年初出。
- (2) 千田(2014)に、「公式サイト、<http://www.hytung.cn/>の説明によると、2014年8月現在で登録済みデータは「古典籍13,000種余り、古典籍の書影500万枚、新聞雑誌の明瞭な画像100万枚、計2100項目のデータと画像を直接対応させており、漢字の合計文字数は25億を超える」という。」とある。」

#### 【参考文献・サイト】

[辞書]

『漢語大詞典』 羅竹風 漢語大詞典出版社 1986～1993

『現代漢語詞典 第七版』 商務印書館 2016

『世界大百科事典 第二版』 平凡社 1998

『大漢和辞典』 諸橋轍次 大修館書店 2000

『日本国語大辞典 第二版』 小学館 2000～2002

『日本大百科全書』 小学館 1994

[データベース] (いずれも最終閲覧日は、2022年1月27日)

「瀚堂典藏データベース」北京時代瀚堂科技有限公司 <https://www-hytung-cn-s.z.library.sh.cn/>

「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」国立国語研究所 <https://nlb.ninjal.ac.jp/>

「古事類苑」 ジャパンナレッジ <https://japanknowledge.com/lib/shelf/kojiruuen/?b=717>  
「中国哲学書電子化計画」 <https://ctext.org/zh>  
「北京語言大学語料庫 (BCC)」 北京語言大学 <http://bcc.blcu.edu.cn/>

[論文]

- 阿川修三・小松建男・佐藤一樹・蔣垂東 (2016) 「シンポジウム 日本、中国の近世、近代における漢字、漢字文化の交流について」『中国文化』(74) 中国語学会 p101-p106
- 荒尾禎秀 (2020) 「日本の近代化に寄与した『福恵全書』における付訓語に関する基礎的研究：2019年度研究成果報告書」 清泉女子大学
- 磯部祐子 (2003) 「中国才子佳人小説の影響—馬琴の場合—」『高岡短期大学紀要』第18巻 p223-p233
- 磯部祐子 (2016) 「江戸時代における『聊齋志異』の受容：『蛭洲餘珠』を例に」『富山大学人文学部紀要』64号 富山大学人文学部 p.402-p.384
- 孫琳浄 (2020) 「『八犬伝』の犬士列伝の構想に関する考察：『水滸伝』の受容を通して」 京都府立大学学術報告『人文』第七十二号 p259-p275
- 千田大介 (2014) 「レビュー&リソース紹介：瀚堂典藏『漢字文献情報処理研究』第15号 JAET-漢字文献情報処理研究会 p114-p117
- 任清梅 (2020) 「都賀庭鐘読本における『水滸伝』の受容について」 下関市立大学論集 64巻1号 下関市立大学学会 p51-p61
- 樊怡君 (2022 予定) 「反転語「探偵」「偵探」について—日本語における「探偵」を中心に—」『言語教育研究』第22号 拓殖大学日本語教育研究所 p11-p25
- 令狐菁菁 (2021) 「明清白話小説と江戸時代における中日の漢語語彙の受容—「端的」を例として」 さいたま言語研究会第六回例会

[書籍]

大庭脩 (1967) 『江戸時代における唐船持渡書の研究』 関西大学東西学術研究所

[サイト] (最終閲覧日は、2022年1月27日)

徳田武 (2020) 「『江戸風雅』22号、製本中！」『江戸風雅』の会公式ブログ

<http://edofuga.blog99.fc2.com/blog-entry-53.html>